

垂水南遺跡発掘調査概報IV

大阪府吹田市垂水町

昭和55年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市教育委員会では、昭和51年度以来、垂水南遺跡緊急発掘調査を、大阪府教育委員会の御指導のもとに、国庫補助事業として実施いたしてまいりました。今年は第4年次にあたり、3箇所の調査を実施することができ、ここにその成果をまとめることができました。

昭和51年の発掘調査開始当初は、遺跡の範囲すら明確に把握できなかつたため、当該地周辺の開発には十分な資料をもつて対処できませんでしたが、本書に述べるような各所の調査によつて、現在では相当充実した資料をもつて指導を行うことが可能となりました。しかし、遺跡の所在する垂水町3丁目一帯は、依然として激しい開発の波にさらされており、一時たりとも目をはなすことができない現状です。

今後も、文化庁・大阪府教育委員会とも十分な協議をもちつつ、埋蔵文化財の保護に努めてゆく所存ですが、市民各位におかれましても、深い御理解と御協力をお願ひいたします。

昭和55年3月31日

吹田市教育委員会

教育長 中村勇一

例　　言

1. 本書は、昭和54年度国庫補助事業として実施された吹田市垂水町3丁目所在垂水南遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は3次にわたって実施された。調査地点および調査期間は次のとおりである。
第1次（通算第14次）　昭和54年6月15日～6月25日　垂水町3丁目28-13
第2次（通算第15次）　昭和54年10月1日～10月31日　垂水町3丁目32-50
第3次（通算第16次）　昭和55年1月30日～2月5日　垂水町3丁目33-9
3. 本書の執筆は吹田市教育委員会社会教育課藤原　学があたり、遺物の整理・実測・トレー等は、関西大学学生　西岡誠司・山口卓也・来村多加史の協力を得た。
4. 発掘調査の実施については、関西大学考古学研究室ほか、大阪府文化財保護推進委員各位の協力、助言をいただいたことを明記して謝意を表する。

目　　次

第1章 発掘調査の契機	1
第2章 位置と環境	2
第3章 発掘調査の経過	3
第4章 発掘調査の成果	3
第5章 総　　括	6

発　掘　調　査　参　加　者

調査担当者	藤原　学	(吹田市教育委員会)
調査員	米田文孝	(関西大学考古学研究室大学院生)
調査補助員	増田真木	(関西大学考古学研究室学生 以下同じ)
"	西岡幸治	西岡誠司
"	白神典之	立石堅志
"	来村多加史	山上弘
"	西本安秀	合田茂伸
"	上田睦	斎藤隆弘

第1章 発掘調査の契機

垂水南遺跡は、昭和41年秋、区画整理事業とともに下水道工事によって発見され、すぐ北方の丘陵地帯に展開する垂水遺跡（弥生時代後期）より一段階新しい遺跡であるとして、注目されていた遺跡である。区画整理完成後も、当地一帯は水田がよくのこされ、大規模開発工事によって、遺物の出土することは少なかった。

しかし、昭和40年代の後半に至ると、地下鉄御堂筋線の延長とともに江坂駅の開設によって、ビル・マンションの建設ラッシュが始まり、埋蔵文化財に対する憂慮の声が聞かれるに至った。

このような状況の中にあって、昭和51年度から国庫補助事業として、本遺跡の緊急調査が開始されたのであるが、それに先立つ同年6月には、垂水町3丁目25におけるビル建設工事中に、遺物が出土し、調査した結果、堅穴住居跡が検出されるなど、当地における埋蔵文化財調査への認識は一段と強いものとなってきた。

昭和51年度の国庫補助事業は、この緊急調査の成果を基礎にして、主に垂水町3丁目22において実施された。

昭和52年度は、遺跡の北半にあたる垂水町3丁目16において実施され、住居跡・河道などが検出された。

昭和53年度は、遺跡の南半にあたる垂水町3丁目27・垂水町3丁目32において実施された。

これらの3カ年にわたる範囲確認調査の結果、遺跡は垂水町3丁目の南北600mの広域におよぶものの、遺物・遺構は東西にかなり偏った分布をしていることが判明した。

すなわち遺跡範囲は、垂水町3丁目8を北限として、旧豊津中学校（現在廢校）に至るまでの、真北より約30度西へ振った600×200mの長辺凸形の範囲が想定されるに至った。

第4年次にあたる昭和54年度においては、これらの成果をふまえ、遺跡南端の垂水町3丁目28-13・同32-50・同33-9において実施された。

遺跡南端付近は從来から、あまり大規模な開発行為ではなく、十分遺跡範囲が把握されておらず、加えて、糸田川の河流の影響等も考えられて、遺跡南端における遺跡の様相を明確にすることは、きわめて有意義なことであった。

第2章 位置と環境

垂水南遺跡は、垂水町3丁目一帯に所在する低地性集落である。現地表は標高2.7~3mで、遺構面は中世期で1.7m前後、古墳時代では1.5~1mである。弥生時代の単独な包含層は、十分な例はないが、1m以下とみられる個所もある。

当地は、前期洪積層の隆起地形として知られる千里丘陵の南端で、この丘陵が3~5mの神崎川の沖積平野に突出するところであり、丘陵との比高差が大きい。沖積平野は、水位の高い湿田地帯で、千里丘陵から流出する糸田川・高川・天竺川の諸河川の流域のみ敵高地を形成している。しかし、これらの諸河川が河床面の高いわゆる天井川であるため、排水等に多くの困難があったことは、よく知られるところであり、さらに昭和15年の糸田川、上の川の決壊による大洪水は、まだ市民の記憶に残るところである。

このような自然環境からみると、垂水南遺跡の立地するところは、概して古代集落として最適な地であったは言い難く、発掘調査によって検出される遺構面下の含水率の高い砂層や、遺構面を流れる白色砂層は、それを証明している。

しかし、このような遺跡立地としての不利を克服して、なお、そこに永きにわたる人々の生活の根拠を見出しえるのは、この地が政治・文化の両面にわたって捨てがたい地であったことを示唆しているものであり、当地周辺の考古学資料に基づいても、先土器時代~中世・近世に至るまで、連続した特色のある遺跡群を構成している。先土器時代ナイフ形石器を出土した垂水遺跡をはじめとして、弥生時代中期後半~後期の垂水弥生遺跡・垂水南遺跡、弥生後期から遺跡の展開をみる藏人遺跡などをみると、弥生中期以降における当地の遺跡の展開は一つの段階を迎えるらしい。古墳時代に入ると、垂水南遺跡・藏人遺跡が最盛期を迎えるが、古墳時代前期前半の段階での一つの空白期を認めるように、弥生~古墳時代への移行は、遺跡分布をみる限り連続したものではない。当地における前期古墳の不鮮明さはそれを基準の上から裏付けているといえよう。

古墳時代以降については、垂水南遺跡では、奈良時代前・後期を通じて、河道や遺物の検出をみるもの、まとまった資料の出現は平安時代初頭に至らなければならず、弘仁3年(812)の東寺領垂水荘の立庄を実証した墨書き土器等の検出をみるとのみである。垂水地区の東方、旧吹田周辺が、このころから神崎川の河港として明確な性格を表出すると同時に、市域各地で在京社寺の荘園として、この垂水荘をはじめ、吹田荘、吉志荘、山田荘等が成立する。猪名川左岸に展開する西摂平野東半の遺跡群の東端をなしていた垂水南遺跡は、神崎川(三國川)が淀川と直結され、その性格を高めると同時に、全く新しい動向を示すのである。遺跡内各所で検出される瓦器等の中世土器はその延長に位置するのである。

第3章 発掘調査の経過

本年度の調査は、次表のとおり3次にわたったが、その対象範囲は昨年と同様に3丁目28番13号～33番9号に至る遺跡の南部に限られた。

調査次	調査期日	調査地域
第1次調査（通算14次）	昭和54.6.15～6.25	垂水町3丁目28-13
第2次調査（通算15次）	昭和54.10.1～10.31	垂水町3丁目32-50
第3次調査（通算16次）	昭和55.1.30～2.5	垂水町3丁目33-9

内業調査は、垂水町3丁目32-50、教育委員会社会教育課分室において、昭和55年3月6日より開始され、3月31日に終了した。

今年次の調査は、住居跡等の遺構の検出がなく、いずれも、坪掘りを主体にして行った。したがって、各次における坪間の相互の関連づけはむづかしく、層序的な観察と出土遺物の検討にゆだねざるを得なかった。

第4章 発掘調査の成果

1. 第1次調査

垂水町3丁目28-13において、小規模な倉庫付事務所が建設されることになり、盛土によって施工するため、とりあえず部分的な査定において開始した。当該地の北方30mにおいては、昭和51年6月に行われたビル建設工事（垂水町3丁目25-17）及び昭和53年2月に行われたマンション建設工事（垂水町3丁目25-12）とともにうる事前調査によって、古墳時代住居址・土壙・溝などが大規模な土器群を伴って検出され、さらに平安時代の河道跡から「垂水庄」を明記する墨書き土器が検出されるなど、本遺跡においては最も重要かつ濃密な遺構・遺物が出土した地点であり、本地点においてもこれらに関連する何らかの所見が得られることが期待された。

発掘調査は、3地点の試掘場でもって開始され、北側から南に順にG1～G3とした。

〈G1〉 4.5m×2.5mの試掘場で、地表より最大の深さ1.5mまで掘り下げた。第Ⅲ層より古墳時代土器細片及び木片も微量みとめたが、この層を下げるとき暗灰色砂層を主体とする含水率の高い砂層となり、遺物等は全くみられなかった。南壁断面にみられる第Ⅳ層からのおちこみは、Ⅳ、Ⅴ層に黄色砂層が混入したものであり、土器等の出土遺物もなく、人為的なものではないと想定される。

〈G2〉 4.6m×2.5mの試掘場で、層序はG1と全く同一であり、遺物も第Ⅲ層において、古墳時代土器細片と木片を若干検出したのみで、これについてもG1と全くかわらない。

〈G3〉 南端に設定された4.8m×1.3mの試掘場で、層序はG1・G2と全く同一である。遺物の出土はなく、第Ⅳ層の暗灰色砂層まで掘り抜いて、試掘を終了した。

出土遺物も第Ⅲ層より細片が微量検出されたもので、それらも各々が関連せず、磨耗を受けていることから、他から流されてきて、本地点に堆積したものであることを証明している。おそらく北方の遺構群・土器群からの流れ込みであろう。

G1・G2・G3の調査所見を組合すると、いずれも層序や層厚、あるいは遺物の包含状況などはほとんど同様である。つまり調査地においては、層的には全く均質な堆積を示し、人為的な構築物があった痕跡ではなく、第Ⅲ層自体が軟弱な含水率の高い砂層であることとそれを裏付けている。北方30mにおける住居址等の遺構面はすべて、この第Ⅲ層と第Ⅳ層の間に存在した硬質の青灰色粘土層上に掘り込まれており、本地点において、この硬質粘土層が欠陥していることより、遺構の存在はほとんど望めないわけである。

2. 第2次調査

垂水町3丁目32-50における旧豊津中学校跡地内において試掘調査を実施した。調査地点は学校敷地内の北側一帯で、将来予想される校舎建設に際して、埋蔵文化財保護の立場から、いかなる対応が必要であるかを判断するために、昨年度から実施している校地内試掘調査の一環として実施された。

調査地点は校地の最北部であるが、この付近は将来の校舎建設予定地点に考えられているうえ、校地の北側を東西に走る街路（巾員5m）を隔てた垂水町3丁目27-5において実施した第7次調査（昭和53年度国庫補助事業で垂水南遺跡発掘調査概報Ⅱにおいて報告済）で、古墳時代土器群を主体とする濃密な土器群が検出されており、この土器群に関連する遺構・遺物が校舎敷地内において検出される可能性が考えられるため、試掘を実施したわけである。

試掘場は、2個所に設けられ、東から西へ順次、G1・G2とした。

〈G1〉 3.2m×4.6mの試掘場で、深さは3m（一部は3.5m）まで掘り下げられた。現校舎面から地表下1.3mまでは、校地造成にかかる盛土で、この面で水田面がはじめて表れてきた。

水田面以下の層序は

層序	土層名	時代	備考
I	黒色土層	現代	水田面
II	茶褐色砂質土層	近世	
III	淡い青灰色粘土層	中世（韓倉・室町）	瓦器片含
IV	灰褐色粘質土層		
V	黄灰色砂層	平安初期	
VI	黒灰色粘土層	古墳時代	炭・土師器・須恵器
VII	灰色粘土層	"	

Ⅳ	茶褐色粘土層		
Ⅴ	灰色砂層		
Ⅵ	青灰色砂層		

でⅦ層以下は原則的には青灰色砂層を主体としながら粘土層と互層をなす土層で、含水率が高め、第1次調査で検出した最下層の暗灰色砂層と相応するものである。

〈G 2〉 G 1 の西側19mのところに設定された。4m×4.7mの試掘場で、現地表下3mまで掘り下げられ、部分的には3.5mまで掘削を行った。

層序はG 1 と全く同一で、層厚もほとんど変わることがない。明確な遺構も検出されなかった。

G 1・G 2 の調査所見を総合し、層序や出土遺物を検討すれば、次のようになる。第Ⅲ層は青灰色粘土層で、層厚は30~40cmあり、他の地区では黄褐色~灰褐色粘土層ともなっている層である。明確な遺構面をもたないが、G 1 では瓦器や、瓦質土壙(6)を検出した。瓦器は細片のため同化できなかったが、比較的小口径の瓶で、高台をもたず、底部は押圧調整度のみられるもので、通有の瓦器瓶では最も新しいタイプと考えられる。伴出した瓦質土壙は、精良な胎土に黒漆色を呈する典型的な瓦質土器で、内面には細かなヨコ方向の刷毛目調整を行っている。土師質土器皿は、器径7cmの小径のもので、内面には黒漆質の有機物が付着している。

他地区においても当該の粘土層からは、瓦器等の出土により、第Ⅲ層は概ね中世期に属することが判明していたが、特に本点では、狭い範囲にかかわらず、比較的まとまった中世土器が出土したといえよう。なお布留式の土師器も少量混在している。

第Ⅴ層は砂層を主体とする薄層で、洪水等の影響によるものとみられる。遺物はほとんどみられないが、G 1 では、須恵器壺(8)が検出された。高台部分の破片であるが、脚端部の平坦面からみて、平安時代にまで下降するものであろうか。

第Ⅳ・V層は同様の条件のもとで堆積したものと考えられる。古墳時代に相当するのは、第Ⅳ・V層で、灰色粘土層を基層とするが、上層の第Ⅳ層は、炭などの混入が多く、第Ⅳ層より暗黒色を呈している。出土遺物のみられるのは第Ⅳ層で、土師器のみでなく、須恵器(6)も検出された。土師器は古式須恵器と共存していることからわかるように布留式土器で、壺を主体とし、小形丸底壺、あるいは二重口縁をもつ大形壺の口縁部もみられた。

小形丸底壺は、口縁部が大きく外に開くものであるが、器厚も大きく概して粗製で、底部は刷毛目調整、内面はヨコヘラケゼリで仕上げている。

壺は大半が口縁端が肥厚するタイプであり、特に(8)は体部下半を欠失するが、粘土面に密着したものである。

このように第Ⅳ・V層は明確な遺構は検出されなかったが、特にG 1 では土師器片等の検出がみられ、北方の昭和53年度第1次調査で確認された、濃密な土器群からの流れとみることができる。G 2 は層序は同じであるが、G 1 に比して土器の出土は少ない。

3. 第3次調査

第2次調査地点の西南方90mにあたる地点を重機を使って試掘した。調査範囲は3m×10mで、現地表になっているコンクリート面を破壊して調査した。盛土が0.45mみられ、その下が旧水田面となっている。以下の層序は、

層序	土 層 名	時 代	備 考
I	黒 色 土 層	現 代	水 田 面
II	茶 褐 色 砂 層	近 世	
III	灰 色 粘 土 層	中 古	土 節 器 細 片
IV	淡 灰 色 粘 土 層		
V	黑 灰 色 粘 土 層	古 墳 時 代	土 器 器 (布留式) 細 片
VI	淡 茶 色 砂 層		
VII	茶 褐 色 砂 層		

でいずれの層位においても、造構が検出されず、第III層及び第V層においては、微量ではあるが、土器細片が検出されたのみである。

第III層は中世期に位置する土層で、土節器の微細片がみられたが、第2次調査G2でみられたような密度ではない。

古墳時代土器包含層は第V層で、わずか10cmほどの黒灰色粘土層であり、この層も布留式土器の微細片がみられたのみで、周囲に造構等の存在を予想できるような出土状況でなく、また土層の堆積も平準な自然堆積と考えられた。

第5章 総 括

今年度の調査は上記の3地点に限られたが、先述したように、第1次調査地点は、垂水南遺跡では最も濃密な造構群を検出したC-8地区のすぐ南にあたり、多くの遺物の検出が予想されたが、調査の結果、少量の土器細片を認めたのみで、意外な成果となった。

特に昭和53年2月の調査では、墨書き土器を包含する平安時代初頭の河道跡が検出されたが、この河道が北から南へと流れしており、その流域方向にあたるため、これに関連する何らかの堆積土が検出されることが予想された。しかし、これに該当する所見は全くなく、したがって河道巾は小さいか、あるいは、当地よりさらに東西方向に振って流れているらしい。(西へ振っている可能性が大か)

第2次調査では2個所の試掘場のうち、G1はG2よりやや土器の出土が目立った。G1は昨年度に調査された土器群により近く、その影響によることが明らかである。これより土器群

の流れが、豊津中学校敷地内に一部でも及んでいるらしいことが推定できるが、昨年度の校地内試掘でも完形に近い甕形土器が検出されており、これらの調査所見をみると限り遺構の有無にかかわらず、校地内に遺物は包蔵されているとみられる。

校地内の南側（グランド側）については未調査であるので、遺物の包蔵がどの範囲まで及んでいるのかについては詳細はわからない。

第2次調査で追記しておくべきことは、第Ⅲ層から瓦器等の中世土器が検出されていることである。遺構にともなったものではないが、明らかに第Ⅲ層において、中世期の生活面があることがみとめられる。

昨年度の校地内調査の第2試掘場において、鎌倉時代の瓦器を包含する水田小鞋群が検出されており、今回の中世土器は、瓦器の形態からみて、やや後出的要素があるものの、層序的にも何らかの関連はある。特に瓦器碗のみならず、灯明皿ともいわれる土師器小皿や瓦質土器なども伴出していることは、住居址などの生活遺構が、ごく近接地にあるともいえ、豊津中学校敷地内においては、古墳時代のみならず、中世期においても水田址・集落跡両面について、きわめて注意を要するといえる。

さて、この瓦器等の出土について若干の点を指摘しておこう。垂水南遺跡は古墳時代前期から後期後半の集落跡として認識され、さらに調査の進行によって、奈良前・後期～平安時代初頭に至る遺物の検出が確認された。しかし、平安時代初頭の大量の土器・瓦の出土をみた第5次調査（通算）の成果によても、これらの遺物群は比較的短期なものに限定され、平安時代中・後期へ遺跡が継承された痕跡は認められない。

これ以後、遺物の出土をみると、本書第2次調査で明らかにしたように、鎌倉時代の瓦器を含む遺物群なのである。層位的にみると、平安時代初頭の土器包含層は白色砂層を混える黒茶色粘質土として検出されることが多いが、その上層は灰～黄褐色の比較的硬い均質な粘土層で、この粘土層から瓦器等中世土器は検出されている。このことは既に、第1次調査で明らかにされていた。第3次調査でも瓦器片をふくむ溝状遺構を検出したほか、第6、7、8、12、13次調査などでも瓦器を検出するなど、ほとんどの調査区で出土が報告されている。このような方をみれば、おそらく遺跡のほぼ全域で瓦器の包含がみとめられると考えてさしつかえない。

ただ、出土遺物をみると、細片で磨耗を受けたもののみでなく、今回のようにややまとまと出土を示すこともある。第13次調査では、水田小鞋群に伴出しているので、唯一の遺構を伴った例であるが、水田中の土器細片は原位置を保ったものとは言い難く、水田の時期決定の資料としか評価できなかった。

さて出土している中世土器をみると、細片が多いが、瓦器による限り、平安期に属する古式の瓦器ではなく、白石氏編年によるⅠ—3型式～Ⅲ型式に至るものであり、その実年代は概ね鎌倉時代後半以降に想定されているものである。

今回検出された瓦質土器は塗町時代のものと考えられ、ここに述べている灰～黄（褐）色粘

土層は鎌倉後半～室町時代であり、さらに上層の砂層からは近世磁器が出土していることから、近世以前には堆積が終了しているらしい。

これらの所見を総合すると、次のようにまとめることができる。まず、平安時代初頭では、明らかに古墳時代の遺構面の直上に生活面があり、古墳時代包含層を削って平安時代河道が流れているのである。延暦年間に行われた三国川の開削は、当地をはじめ流域の安定化をもたらしたであろうとの指摘には賛成であるが、これを機に水田の安定化が急速に進んだと考えたい。

次に、糸田川、高川、天竺川等のことについてであるが、島田次郎氏は『日本中世村落史の研究』において、三国川の安定化と天井川の固定とは別の問題であるように述べたが、この見解は考古資料によっても正しいと判断される。すなわち、平安初頭の生活面となった白色砂混り黒色粘質土と、中世生活面となった灰～黄（褐）色粘土層とはレベルの差のみでなく、土質的にみても湿田から乾田化へ向ったことを示していると判断され、この所見は当地の開発が進み、水田がより安定したためと考えるのが最も妥当である。

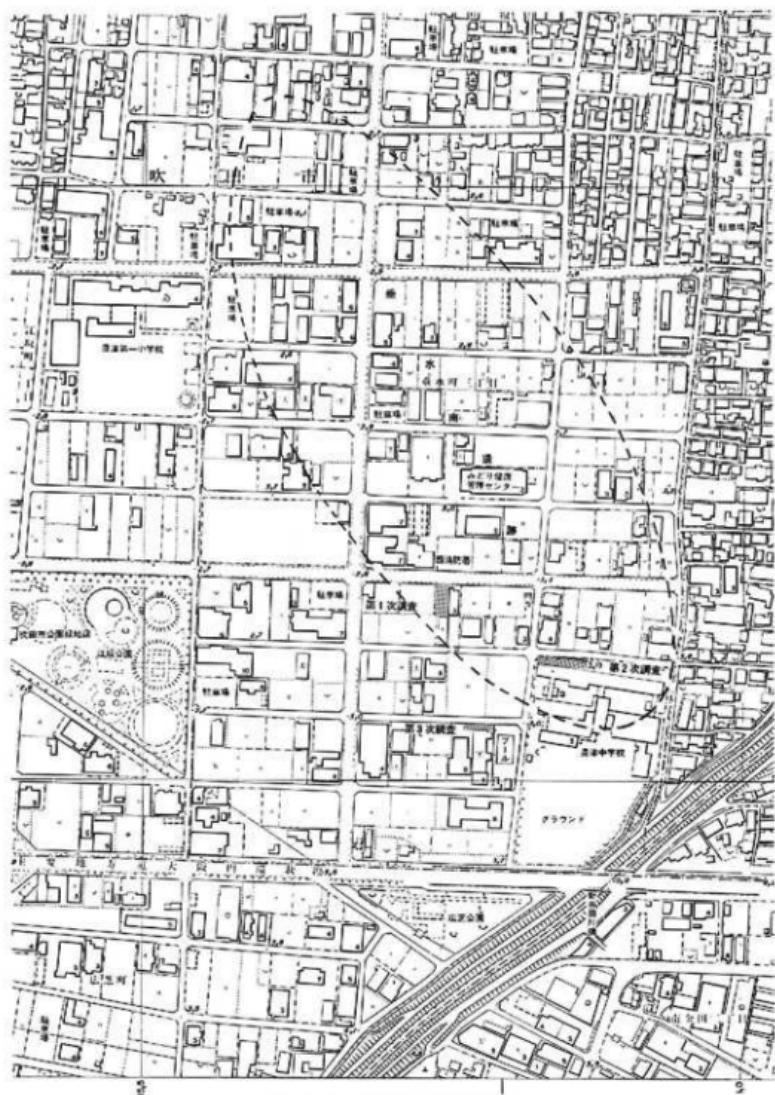
さらに、この水田の安定をもたらした粘土層を各所の土層序に照らし合わせてみると、糸田川に近づくに従って層厚が増してゆく傾向があり、天井川の流域にみられる微高地は、平安時代以降における河床上昇の結果であることを示している。

すなわち、平安初頭以降の水田面の上昇と、乾田化は天井川の固定による要因が最も強いとみられるのである。

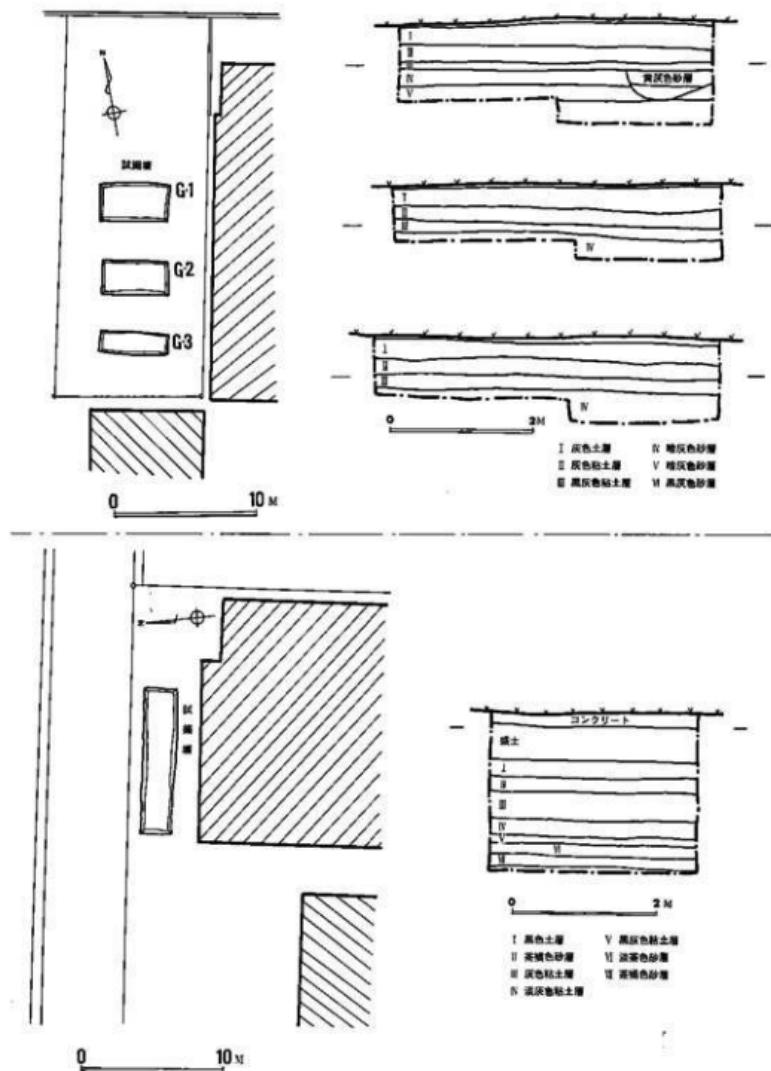
次いでこれを文献からみると、文治5年（1189）の「摂津垂水西牧権坂郷田畠取帳」にみえる権坂郷域の東限をみると、現在の糸田川の流路に一致し、平安時代最末期の糸田川は現状と同じ流路で固定されていたことが明らかであり、先に述べた水田の安定化への新たな段階に至っていたことがうかがえる。この田畠取帳の分析によると、権坂郷内における土地所有関係は、北方高地部や西部には、職出、諸司寮田等の律令体制的な田地が主として展開し、東寺領・清住寺領をはじめとする諸寺莊園は、三国川に近い南方低湿地に偏在する傾向にあるという。すなわち、権坂郷の開発は西方・北方の安定した地域から開始され、三国川や糸田川に近い南方の低湿地は、開発がおくれていたとされている。

垂水南遺跡の範囲はこのうち後者にあたり、開発条件が悪い方であったことが知られており、田畠取帳の分析結果は古代～中世期における遺物の出土状態に一つの示唆を与える。

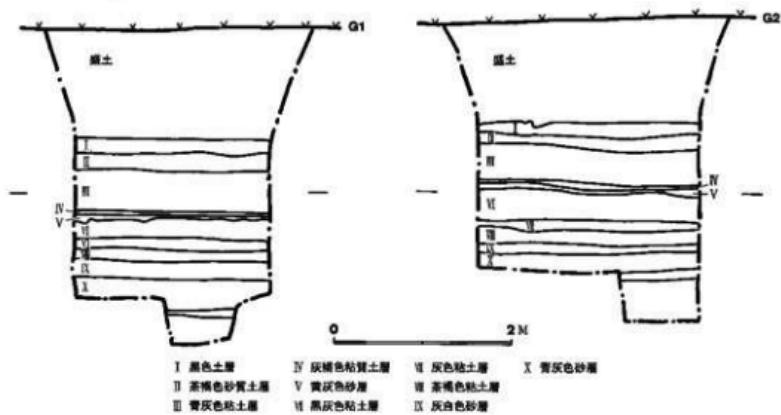
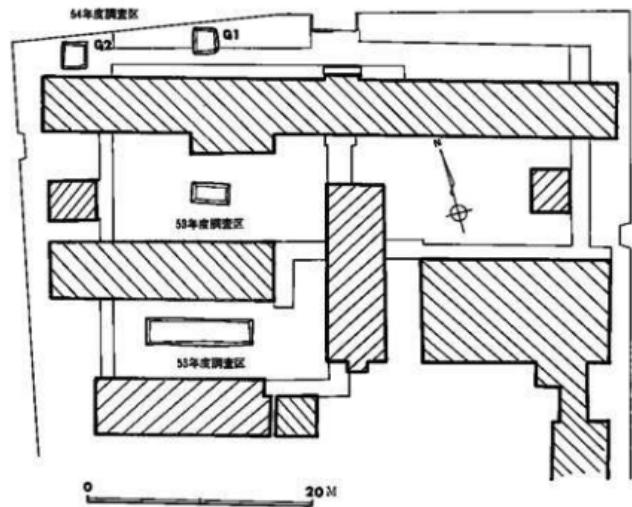
なお、垂水南遺跡は、文治5年の田畠取帳では大半が清住寺領に重なる。島田次郎氏はこの清住寺領について、仁平2年（1152）初見の清住寺領吹田東西莊のうちの西莊にあたるのではないかとの見方を示したが、これは亘節氏が『吹田志稿』で、「吹田西莊」を「現在の吹田市西之庄町付近」とした見解とは明らかに相違する。吹田莊は、基貞親王が貞観7年（865）に清住寺に施入して成立した莊園で、平安初期からの歴史をもつものである。垂水南遺跡出土の奈良～平安期の遺物については、特に東寺領垂水莊の立莊を裏付ける資料が明らかにされている反面、実体不詳な莊園名も明らかにされているのである。今後、古代～中世遺物の出土を詳細に検討すれば、この問題についても何らかの手がかりが得られるかもしれない。



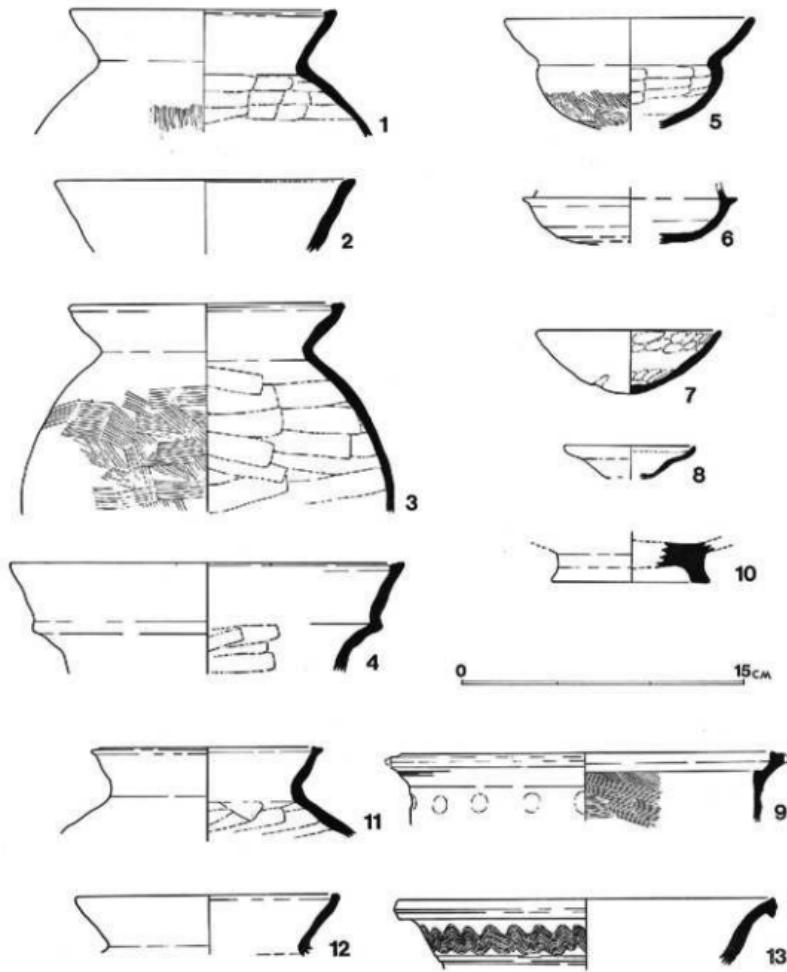
第1図 垂水南遺跡と調査区位置図



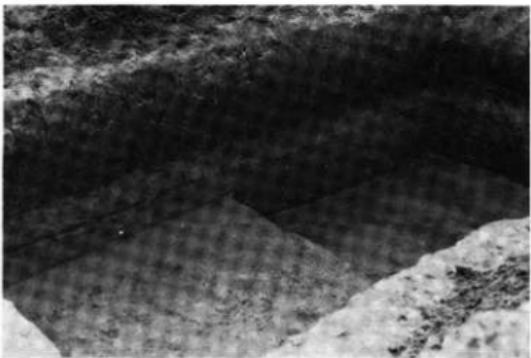
第2図 第1・3次調査平面及び断面図



第3図 第2次調査平面及び断面図



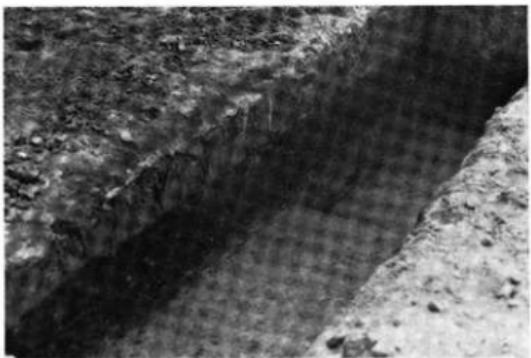
第4図 出土遺物実測図



G 1



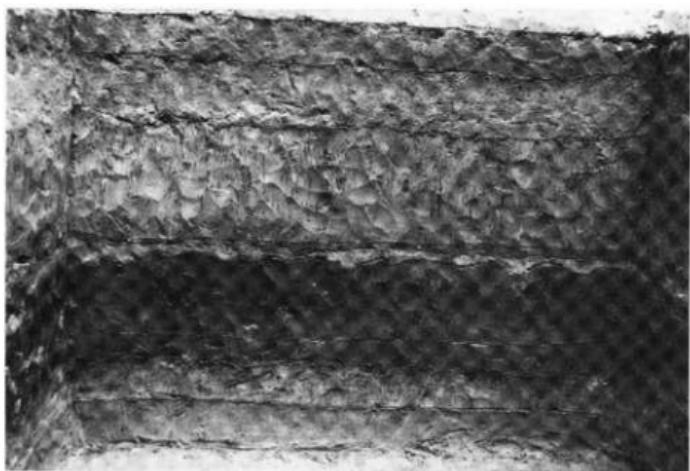
G 2



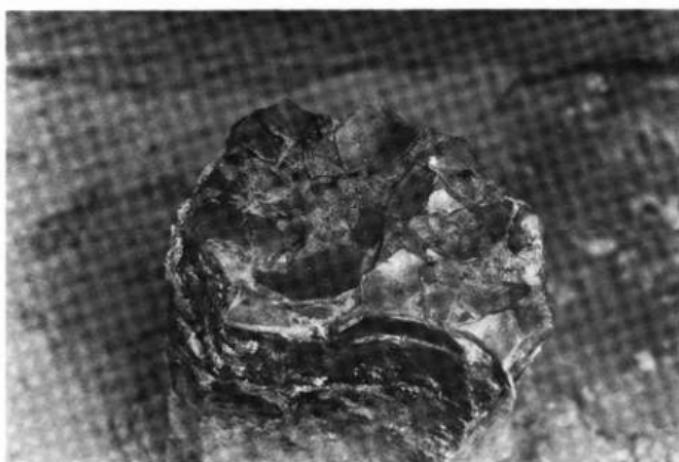
G 3



G1 金 坟



G1 土層斷面



G 1 土師器出土狀態



G 2 全 墓

図版第四 第三次調査及び調査風景



第三次調査区 全景



第1次調査 調査風景